

輸出額ノ概計セハ左ノ如シ

生産額	輸出額	數量	價格
二六〇、九四六	七一、九九五		四、六六八、六三一
			一、六五六、六八五

右輸出額ノ中海外ク輸出セラル、モノハ野田銚子産ヲ主トスレドモ其數量詳カナラズ然レトモ左ニ參考ノ爲メ野田醬油ノ既往五ケ年間ニ輸出セラレタル石數及價額ヲ示サン

年	數量	價	額
三十五年	四、六六三	一〇五、八六二	
三十六年	七、〇六六	一四六、三六六	
三十七年	六、四一七	一四四、三六〇	
三十八年	五、八七〇	一三八、八一三	
三十九年	五、二三〇	一一〇、三八九	

二、仕向地

内國ニアリテハ東京ヲ第一トシ神奈川、茨城、埼玉及北海道並臺灣其他各地ニ販賣セラル
外國ニテハ支那、朝鮮、滿州地方ヨリ英、米、獨、布哇、加奈陀、濠州、浦鹽斯德等ニシテ且ツ漸次新販路ヲ擴張セラル、形勢ナリ

(九) 販賣手續取引慣習

内地販賣ノモノニ在テハ東京其他各地ノ仲買業者又ハ問屋ノ注文ヲ受ケカ販賣スルヲ普通トシ外國輸出ハ京濱ノ買易商ヲ經テ在外特約店ニ販賣セラル、ヲ常トス而シテ取引ハ東京ノ問屋ヘ向ケ出荷スルモノハ見詰ト稱シ隔月ニ其積送高ニ對スル概算勘定ヲ爲シ毎年六月十二日又ハ七月一月ノ兩度ニ於テ精算スルヲ常トス又内國各地方及外國取引ノモノハ現品到着後三十日又ハ六十日拂ニシテ多ク荷爲替ヲ取組ムモノトス

(一〇) 相場

野田醬油及佐原醬油ノ相場左ノ如シ

一、野田醬油

商標ノ種別	單位	價格
萬印	參圓	
香印	貳圓七拾錢	
命印	貳圓六拾錢	
水上印	貳圓五拾錢	
きのへ子印	貳圓參拾錢	
上最印	貳圓九拾錢	
富貴印	貳圓參拾錢	
今印	貳圓六拾錢	

二、佐原醬油並ニ粕

一石ニ對スル平均相場ハ左ノ如シ

生揚 貳拾圓

千葉縣

二番 拾五圓
 三番 拾圓
 粕 壹圓五拾錢

(一) 輸出ノ狀況及用途需用程度等

野田桃子等ノ最上醬油ハ近來著シク需用増加シ却テ生産額ノ之ニ伴ハサルノ盛況ヲ呈セリ尙海外ニ於ケル需用者ハ主トシテ本邦人ニ在ルヲ以テ年々渡航移住者ノ増加ト共ニ輸出高益々増大スル趨勢ヲ示セリ
 最上醬油用途ハ主トシテ中流社會以上ノ調理用ニ供セラレ濃厚ナルモノヲ嗜好セラル中等品以下ハ一般日用品トシテ需用アリ

(二) 荷造法其費用運賃諸費

荷造ハ大抵九升入ノ樽詰ニシテ立漚ヲ掛ケ商標ヲ附ス又燻詰ノモノ往ニアルモ是等ハ主トシテ小賣品ナリ尙ホ海外輸出ノモノハ樽ノ構造等一層堅牢ナルヲ要スルガ故ニ二三年來ハ特製ノ樽ヲ用ヒ其内側ニハ漆ヲ塗り以テ液ノ浸出ヲ豫防スル等鄭重ナル荷造ヲ爲セリ
 樽ハ現今多リ秋田、紀伊産杉材ヲ購入シテ産地ニ於テ之ヲ製作セルモノ、外東京ヨリ作製シタルモノヲ輸入ス而シテ樽ニハ三級アリ一番樽ハ金四拾錢二番樽ハ金貳拾五錢三番樽ハ金貳拾錢ナリ繩代其他荷造費用一樽ニ付平均五錢位トス

運賃ハ發着地ニヨリ一定セザルモ左ニ野田町、佐原町及君津郡木更津ノ三方面ヨリ東京迄ノ運賃ハ左ノ如シ

- 一、野田町ヨリ江戸川廻リ東京迄 壹樽ニ付 約貳錢五厘
- 二、佐原ヨリ汽車積東京迄 壹樽ニ付 約參錢

三、木更津町ヨリ汽車積東京迄

一樽ニ付 貳錢二厘

(二三) 重ナル製造業者及取扱商店(一ヶ年一千石以上ヲ醸造スルモノ)

製造業者

東葛飾郡野田町	茂木七郎右衛門
同	茂木佐平治
同	高橋兵右衛門
同	茂木芳五郎
同	茂木七右衛門
同	都邊與四郎
同	山下富三郎
同	山下平兵衛
同	茂木勇左衛門
同	茂木啓三郎
同	吉田甚左衛門
同	堀切綾次郎
同	秋元三左衛門
同	市川町 田中喜兵衛
同	松戸町 高橋庄吉

海上郡銚子町	濱口合名會社
同	岩崎重次郎
同	馬場善兵衛
同	濱口吉兵衛
同 本銚子町	田中玄蕃
香取郡佐原町	管井與左衛門
同	加瀬庄次郎
同	兜印醬油合名會社
同	深井吉兵衛
同 笹川村	多田庄兵衛
君津郡飯野村	鳥海才平
同	中村熊太
同 小糸村	鎌田善次郎
同 港町	夏目五郎兵衛
同 竹岡村	池田豐吉
同 周西村	阪井四郎治
同 青堀村	宮川豐八
取扱商店	

東京市神田區	増田嘉助
同	高崎長左衛門
同 日本橋區	遠山市郎兵衛
同	中條瀬兵衛
同	岡田合資會社
同	濱口吉左衛門
同	升本喜三郎
同	國分勘兵衛
同	高梨仁三郎
同	中野長兵衛
同	村上治兵衛
同 京橋區	中井半三郎
同	宮崎重次郎
同	蜂須賀與市
同	森六郎
同	高崎爲造
同	鈴木忠左衛門
同	中澤彦吉

(二四) 縣同業組合團體及個人事業上ノ施設

明治二十年以來野田銚子君津及千葉市原地方ノ醸造家ハ醸造組合格約ヲ設ケ各自製品ノ改善ヲ圖ルノミナラズ野田町ニ於ケル同業者ハ明治三十八年四月ヨリ毎月一回麴品評會ヲ開催シ製麴ノ出品ニ對シ其優劣ヲ審査スルノ方法ヲ設ケ又同業者ノ醸金ヲ以テ三十八年十月醬油醸造試驗場ヲ設置シ原料ノ分拆及製造方法ノ研究ヲナセリ

(五) 酒類

(一) 産額及種類

年	清酒		味淋		濁酒		焼酎及白酒		計	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額		
三十四年	七四三三八	二二二〇〇六七	八九六五	四〇六七七	一一三〇三	二七五〇五三	四、六六七	一九六、九〇五	一〇〇、二六三	二〇、九八、八一
三十五年	五四六三二	一七二、〇三一	七九六六	四、五九、七九〇	六、四四〇	一六四、一八四	四、四〇一	二一六、一三九	七三、四三八	一五、五二、一四四
三十六年	五、一九八九	一、五九〇、一四九	九、一〇一	四、四四、一二六	六、五五九	一五五、〇六七	四、七七〇	二〇九、七九五	七二、四一九	一三、三九、一三七
三十七年	五、〇四六	一、六三八、七七五	一〇、一四八	五、二九、三七八	六、八五二	一七二、七〇〇	五、三九二	二五六、二七三	七三、四三八	一五、五九、七二六
三十八年	四、七六七	一、七七七、二六八	九、九一四	五、三三、三四五	六、五八六	一六五、九二九	四、九七一	二七四、三四〇	六九、一四六	一三、七四、〇、八九二

備考 三十八年ノ統計ハ三十七年酒造年度(自十月一日起至翌九月三十日)ノ査定ニ依ルモノヲ掲載セルモノトス

(二) 主要産地

香取郡佐原、神崎、小見川町最モ主ナル産地ニシテ東葛飾郡流山町ハ味淋ノ主産地トシテ知ラル

(三) 製造場數(三十八年)

製造場數

五五六

(四) 製産ノ狀況

縣下香取郡及東葛飾郡等ノ如キ主要産地ニ在テハ稍進歩セル方法ニ依リ醸造ヲナスモノナキニアラザルモ其他各地ノ酒造家ハ殆ト舊慣ヲ墨守シ作業上進歩ノ見ルベキモノナク僅ニ其地方ニ於ケル需用ニ應スルニ止マレリ從テ近來運輸機關ノ發達ニ伴ヒ和洋酒類ノ縣内ニ輸入セラル、モノ多ク地酒ハ漸次之ニ壓セラレ需要減退ノ形勢ニアリ單リ香取郡ニ於ケル酒類ハ東京其他各地ニ於テ年々多少ノ需要ヲ進メツ、アルヲ以テ稍々盛ナルモノアリト雖モ本縣ニ於ケル斯業ノ一般趨勢ハ漸次退歩ノ狀態ニ在リト云フヲ得ヘシ唯本縣ノ味淋ハ品質良好ニシテ他府縣産ヲ凌駕スルヲ以テ益々市上ニ信用厚ク逐年需要増加ノ好況ヲ見ルノミナラス近時一般生活程度ノ上進著シク上等調理用トシテ供用セラル、モノ益々多キヲ加フルカ故ニ將來味淋ノ醸造ハ蓋シ其望多カルベシ

(五) 原料ノ需用供給

原料米ハ重ニ本縣産米ヲ使用シ幾分ハ埼玉、茨城地方ヨリ供給セラル

(六) 生産費及ヒ收益比較

一、清酒(三十九年)

收入

一金四拾圓拾貳錢

内

金參拾九圓

金壹圓拾貳錢

支出

清酒一石販賣價格

同上ヨリ生スル粕販賣價格

千葉縣

一金參拾八圓五拾貳錢

内

金拾貳圓五拾錢

金貳圓五拾錢

金四拾貳錢

金壹圓

金拾八圓參拾錢

金貳圓八拾錢

金壹圓

差引

金壹圓六拾錢

二、味 淋

收入

一金四拾四圓廿八錢五厘

支出

一金四拾貳圓廿八錢五厘

内

金貳拾參圓

糯米一石代

玄米一石代

職工賃銀

薪炭料

倉庫修繕器具器械費

造石稅所得稅營業稅其他

蒸發料、器具器械吸收量

流通資本金利子

益金

味淋一石販賣價格

金拾九圓廿八錢五厘

差引

金貳圓

益金

職工其他製產諸費(諸稅ヲ含ム)

(七) 販出額及仕向地

香取、東葛飾等主産地ニ於ケル酒類ハ其製産額ノ約五六分ヲ縣外ニ輸出ス而シテ其主ナル仕向地ハ東京ニシテ其他茨城、埼玉、神奈川等ノ各地へ販出セラル、モノ多少アリ其他海外へ輸出セラル、モノ多少アレドモ其額極メテ少シ

味淋ハ其産額ノ大部分ヲ東京市へ販出ス左ニ明治三十八年ニ於ケル清酒、味淋及焼酎、白酒等ニ就キ其産額ニ對スル縣外輸出額ヲ示サン

清酒	味淋	焼酎其他	生産		輸出	
			數量	價額	數量	價格
四七、六七五	九、九一四	一一、六〇〇	一、七七七	二六八	五、二八〇	一九三、一八六
			五二三	三四五	六、五一〇	三六〇、八五〇
			四四〇	二六九	一、二四一	四九、六三〇

備考 本表ニ依レハ味淋ノ輸出高ハ生産高ニ對シ頗ル少額ナレトモ實際ノ輸出高ハ尙ホ遙カニ多大ナルガ如シ

(八) 販賣手續及取引慣習

東京其他縣外輸出ニ係ルモノハ仕向先商店ト直接ニ取引販賣スルモノ少ク大抵仲買業者ニ委託販賣ヲ爲ス

(九) 相場

三十九年中一石ノ平均相場ハ左ノ如シ

千葉縣

年次	花生油		菜種油		胡麻油		計	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額		
三十五年	一三九	六、九五〇	七、二二九	二一八、〇三五	一、二九六	五七、六七三	八、五六四	二七九、五七七
三十六年	一三三	四、九二〇	六、七七一	三三六、九四二	二、二二八	九六、二五四	九、〇四二	三三四、四二六
三十七年	八九	四、七八六	六、一一四	二二四、五二八	八四九	四一、〇七四	七、〇五二	二七〇、三八八
三十八年	三三七	一五、二四〇	四、四八九	一八七、六〇四	一、一九六	五五、〇一九	六、〇〇八	二五七、八六三
三十九年	九〇〇	五、〇三二	五、四四四	八七、五二七	二、九一六	一四〇、〇八五	九、四六〇	四二八、二四六
計	九三、二八八	三三、八五二	三七、〇六四	九一、八五一	三〇、〇四〇	九、七九三	四九、三二九	一一五、四九六

本表ノ外桐實油、綿實油、亞麻仁油、椽油ノ數種アルモ其產額合計六百石餘價額二萬七千圓餘ニ過キズ

(二) 主要産地

花生油ハ縣下匝瑛郡共興村、海上郡銚子、町本銚子町及旭町

菜種油及胡麻油ハ海上郡銚子町外二ヶ町及千葉郡蘇我町、市原郡八幡町

(三) 事業ノ沿革

先ツ花生油ハ明治十年ノ頃匝瑛郡共興村土屋常造ナル者當時同郡内共和村地方ニ於テ盛ニ栽培サル、落花生中小粒落花生(一名豆落花或ハ赤落花又ハ金時トモ云フ)ハ製油ノ原料トテ最モ適良ナルヲ認メ之ヲ油ニ製造セルニ始マレリ然ルニ當時ハ單ニ食料トシテ僅カニ一地方ノ需要アリタリシニ止マレルヲ以テ産額多カラサリシガ其後明治十六年ノ頃毛織物製造及石鹼原料トシテ需用ヲ増加シ一般ノ事業ノ振興ヲ促カシ以テ今日ニ及ヘリ

菜種油及胡麻油等ハ燈火用及食料ノ一部トシテ往時ヨリ製造シ來リシカ維新以後石油ノ需用ノ急進セルヲ以テ一時

著シク需用ヲ減シ一般ニ衰退ニ赴キシガ近時諸工業ノ勃興ニ伴ヒ工業用トシテ此種油類ノ需用漸ク増進シ以テ今日ノ産出アルニ至レリ

(四) 製造工數及職工數(三十九年末現在)

(イ) 家内工業

製造戸數

二百六十三戸

内

花生油

二戸

菜種油

二百五十四戸

胡麻油

七戸

職工數

三百三十五人

内

花生油

五人

菜種油及胡麻油

三百三十人

(ロ) 工場作業

工場數

五ヶ所

内

花生油

一ヶ所

菜種油及胡麻油

四ヶ所

千葉縣

職工數

七十六人

内

落花生油

二十一人

菜種油及胡麻油

五十五人

馬力

四十六馬力二

内

落花生油

十六馬力

菜種油及胡麻油

三十馬力二

(五) 製産ノ狀況

本縣下ニ於ケル諸油製造ハ一般ニ家内の工業ニシテ其工場ヲ設備シ專業トシテ之ヲ營ムモノハ僅ニ五名アルニ過キズ今左ニ是等工場ノ位置、名稱、製油種類及使用馬力ヲ示セハ左ノ如シ

匝瑳郡 共興村

落花生油

(汽機十六馬力)

土屋製油工場

千葉郡 蘇家町

菜種及胡麻油

(同 五馬力)

今井製油合資會社

同

(同 五馬力)

齋藤製油工場

市原郡 八幡町

同

(同 五馬力)

木口榮太郎製油所

同

(同 五馬力)

木口辱三郎製油場

同

(同 五馬力)

同

本品ノ製造ハ各工場共大抵年中間斷ナリ作業スト雖モ落花生油ハ原ノ收穫期即チ十月以降菜種油及胡麻油ハ八九月ヨリ十一月頃迄最モ盛ニ製造セラル而シテ本業ハ沿革ニ於テ記述セル如ク近來機械工業長足ノ發達ヲ爲シテ需用大ニ増加セシガ日露戰爭ノ際一時打撃ヲ蒙リ其產出ヲ減セシモ爾後落花生油ニ在リテハ毛織物製造用及ヒ鱈其他魚類ノ罐詰用トシテ需用ヲ進メ菜種胡麻油等ニ在リテモ戰後機械工業用トシテ使用セラル、モノ益多ク且其油粕ガ肥料トシテ益々賣行良シキヲ以テ製産極メテ盛況ヲ呈シ爲メニ三十九年ハ落花生油ニ於テ實ニ約三倍ヲ増加シ菜種油ニアツテ五萬八千余圓胡麻油ニ於テ八萬五千餘圓ノ増加ヲ示セリ

(六) 原料ノ需用供給

原料落花生ハ本縣產出ノモノ及茨地、神奈川、靜岡ノ各縣產ノモノニシテ都テ小粒落花生ヲ使用ス
菜種及胡麻モ亦本縣產ヲ主ニ用フレトモ養蠶業ノ發達スルニ從ヒ菜種ノ產額ハ逐年減少ニ傾キ原料充分ナラザルト品質ノ撰擇ヲ要スル等ニ依リ茨城其他ノ近縣ヨリ需用シ特ニ近來滿州地方ニテ產出スル菜種及胡麻ヲ橫濱市ノ取扱商店ト特約シテ購入ヲ爲ス

(七) 製産費及ビ收益比較

一、落花生油製産費(土屋製油工場三十九年物一石ニ對シ)

金七拾貳圓

原料小粒落花生代

金壹圓貳拾錢

製造賃金

千葉縣

金壹圓四拾錢

容器代

金五拾錢

八日市ヨリ東京迄ノ運賃

計 金七拾五圓拾錢

收益比較

金五拾五圓

落花生油一石ノ販賣價額

金貳拾貳圓五拾錢

右ヨリ生ヌル搾粕七十二貫目ノ價額

計 金七拾七圓五拾錢

内

金七拾五圓拾錢

生産費

差引

金貳圓四拾錢

益金

二、菜種油生産費(主産地蘇家町三十九年物一石ニ對シ)

金五拾四圓五拾錢

原料菜種代

金貳圓五拾錢

製産賃金

金四圓五拾錢

薪炭代又雜費

金九拾八錢

諸税金

計 金六拾貳圓五拾參錢

收益比較

金四拾參圓參拾錢

菜種油一石ノ販賣價額

金貳拾貳圓五拾錢

同上ヨリ生ヌル搾粕代

計 金六拾五圓八拾錢

内

金六拾貳圓五拾參錢

生産費

差引

金參圓廿七錢

益金

三、胡麻油生産費(主産地蘇家町三十九年物一石ニ對シ)

金六拾八圓五拾錢

原料胡麻代

金貳圓

製産賃金

金參圓五錢

薪炭代及雜費

金壹圓拾六錢

楮税金

計 金七拾四圓七拾壹錢

收益比較

金六拾參圓

胡麻油一石ノ販賣價額

金拾四圓四拾錢

同上ヨリ生ヌル搾粕價格

計 金七拾七圓四拾錢

内

金七拾四圓七拾壹錢

生産費

差引

金貳圓六拾九錢

益金

(八) 販出額及仕向地

落花生、菜種、胡麻及其他諸油ノ販出額ハ詳カナラサルモ二三當業者ニ就テ調査セル所ノ概數ヲ示セハ左ノ如シ

年	落花生油	菜種油	胡麻油	計
三十八年	四九六 _石	一、七九〇 _石	四五〇 _石	二、七三六 _石
三十九年	七九〇	二、四二二	一、五〇九	四、七二一

備考 三十八年ノ落花生油産額ハ縣統計ニ依ルトキハ三百二十七石ニシテ本計數ト百六十石ノ差アリ然レトモ各府縣統計ハ一般ニ實數ニ達セサルモノ少ナカラサルカ故ニ不符合ノ儘茲ニ之ヲ記載ス

(九) 販賣手續及取引慣習

製造業者ハ仕向先問屋ト豫約シテ其製品ヲ送付シ現物仕送後大抵一週間乃至二週間内ニ代金ヲ受取ルヲ例トス只落花生油製造業者土^生工場ニアリテハ東京支店ヲ經テ各地ノ問屋ニ送り海外向ノモノハ横濱及神戸商館へ賣込ムモノトス而シテ販賣高ノ百分ノ一ノ手数料ヲ支拂ノ其取引ハ凡テ現金賣リナレトモ東京市内ニアリテハ毎月二期ニ於各計算勘定ヲ爲スノ例モアリト云フ

(一〇) 相場

明治三十九年度ニ於ケル落花生油外二品ノ平均相場ハ左ノ如シ

- 一、落花生油 (一石ニ付) 特號 金六拾五圓 壹號 金六拾五圓 貳號 金五拾五圓

同 油粕(二貫ニ付) 金貳拾貳錢五厘

二、菜種油 (一石ニ付) 金四拾參圓參拾錢

同 油粕(壹貫目ニ付) 金貳拾貳錢五厘

三、胡麻油 (一石ニ付) 金六拾參圓

同 油粕(壹貫目ニ付) 金貳拾貳錢五厘

(一一) 荷造法其費用并運賃諸費

落花生油ハ瓠力罐詰ト爲シ菜種及胡麻油ハ一斗入石油空罐ニ入レ二罐ヲ箱詰ト爲ス其費用約三十六錢ヲ要ス千葉縣蘇我町ヨリ東京迄ノ賃金ハ左ノ如シ

- 油 (壹箱ニ付) 金貳錢五厘
- 粕 (壹枚四貫目ニ付) 金壹錢二厘

(一二) 重ナル製造業者及取扱商店

製造業者	取扱商店
匝瑳郡共興村	土屋常藏
海上郡銚子町	岡本吉兵衛
同	常世由喜平
同	根本忠吉
同	西村ムラ
同	高橋利平

同 大里庄治郎
 千葉郡蘇我町 今井製油合資會社
 同 齊藤多助
 市原郡八幡町 木口榮太郎
 同 木口辰三郎

取扱商店
 東京市日本橋區 土屋支店
 横濱市梅ヶ枝町 中尾邦藏
 同 境町 矢代字勝
 同 港町 淺場商店
 同 尾上町 大山太吉
 (以上ハ主トシテ落花生油ヲ取扱フ)
 東京市京橋區 鈴木嘉助
 同 星井忠右衛門
 同 深川區 草薙金七
 同 鈴木和三郎

(七) 澱粉

(一) 産額及種類

年	甘藷澱粉		馬鈴薯澱粉		計	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
明治三十五年	三三五、六二五	一一四、六六六	一〇四、八九六	五五、八二二	四四〇、五二一	一七〇、四八八
同 三十六年	三五九、八六六	一一七、八四一	九四、二四五	五三、一一四	四五四、〇一一	一七〇、九五五
同 三十七年	四三九、九一五	一一〇、七〇六	八七、六八〇	四三、六六七	五二七、五九五	一六四、三七三
同 三十八年	三九三、六九五	一一六、四六六	六〇、三二〇	二一、〇六四	四五三、〇〇五	一三三、五三〇
同 三十九年	四四〇、八五七	一六二、三九六	七一、〇四九	三一、四四六	五一一、九〇六	一九三、八四二

(二) 主要産地

千葉郡千葉町及蘇我町ヲ主ナル地方トス

(三) 事業ノ沿革

甘藷澱粉製造ノ起源ハ天保五年ノ頃千葉郡蘇我町大塚十右衛門ナルモノ、創業ニ係リ同八年十月野州ノ人ニテ絹物商中里新兵衛ナルモノヲ聘シ手摺製法ノ傳習ヲ受ケ嘉永年間迄同法ニ依リ製造シ來レリ而シテ其製品ハ僅ニ機糊ノ需用トナルニ過キサリシカ萬延元年ニ至リ十右衛門ノ考案ニヨリ絹糊ヲ用キ製法ニ改良ヲ加ヘテ稍ヤ純良ノ晒粉トナシ小箱入販賣ヲ爲セリ降テ明治三年ノ頃更ニ陰乾法ヲ案出シ始メテ之ヲ食料品ニ充ツルコトヲ得タリシヲ以テ漸ク世上ノ好評ヲ博セリ其後其製法及器械ノ使用等ニ付當業者研究ノ結果大ニ改良セラルル所アリ爲メニ其品質佳良トナリ各地方ノ需要益々増進シ逐年好況ヲ呈シ以テ今日ニ及ヘリ

(四) 製造戸數及職工數(明治二十九年)

製造戸數

百六十六戸

職工數

四百七十一人

(五) 製産ノ狀況

本品ノ製造ハ家内の工業ニ屬シ之ヲ專業トナスモノハ未タ甚ク少ナク農家ノ餘業トシテ製スルモノ多シ抑モ本業ハ沿革ニ於テ之ヲ述ヘタル如ク明治維新以後ニ於テ漸ク盛大トナリ殊ニ明治二十四五年以降三十二年ニ至ル間ハ其進歩極メテ著シク原料ノ栽培撰擇及製法等ノ改良盛ニ行ハレ品質益々善良トナリ逐年需要増進シ現今ニアリテハ年々四五十萬貫ノ産出アルヲ見ル然レトモ此趨勢ニ伴ヒ粗製ノ弊近時漸ク盛ナラントス此ヲ以テ當時重要物産同業組合法ニヨリ組合ヲ組織シ此種弊害ノ防遏及販路ノ擴張ニ努メントスルノ計畫當業者間ニ進行シツ、アルノミナラス織物、石鹼、製紙等各種工業ノ益々盛ナルニ伴ヒ工業用ノ用途ニ供セラルルモノ亦益々増加セントスルノ狀況ニアルヲ以テ斯業ノ前途益々有望ナルヘシ

(六) 原料ノ需用供給

本縣下ニ於ケル甘藷、馬鈴薯ハ一ヶ年産額甘藷三千萬貫馬鈴薯百二十萬貫内外ヲ産シ品質良好ナレトモ近來東京其他隣縣ヘノ輸出スルモノ多ク爲メニ主産地タル千葉及蘇我町ノ當業者ノ如キハ甘藷ハ主トシテ千葉郡内及山武郡内ニ於テ産出スルモノヲ用フレトモ馬鈴薯ハ印幡郡八街地方其他東京府下豊多摩郡及神奈川縣下程ヶ谷附近ニ産出ノモノヲ輸入シ居レリ

(七) 生産費及收益ノ比較

(一) 甘藷澱粉生産費(千葉郡蘇我町ニ於ケル三十九年ノ物一貫目ニ對シ)

金貳拾五錢 原料甘藷代
 金五錢五厘 生産賃金及雜費

金五厘

諸税金

計 金參拾壹錢

收益比較

金參拾五錢

澱粉一貫目販賣價格

内

金參拾壹錢

生産費

差引

金四錢

益金

(二) 馬鈴薯澱粉生産費(千葉郡蘇我町ニ於ケル三十九年ノ物一貫目ニ對シ)

金參拾壹錢 原料馬鈴薯代
 金六錢 生産賃金及雜費
 金五厘 諸税金

計 金參拾七錢五厘

收益比較

金四拾錢

澱粉一貫目販賣價格

内

金參拾七錢五厘

生産費

差引

千葉縣

金貳錢五厘

益金

(八) 販出額及仕向先

澱粉ハ其産額ノ大部分縣外ニ輸出ス今主産地ニ於ケル當業者ニ就キ調査セル最近ニケ年ノ販出額ハ左ノ如シ

年	甘 薯 澱 粉		馬 鈴 薯 澱 粉	
	數 量	價 額	數 量	價 額
三十八年	三七一、七七九 _斤	一〇九、六一七 _圓	五八、六二八 _斤	二〇、三五〇 _圓
三十九年	四〇九、三八三	一五一、四九〇	六七、〇九三	二九、七六二

仕向先ハ東京ヲ第一トシ大坂、京都、群馬、埼玉、静岡ノ各縣及九州地方之ニ亞ク

(九) 販賣手續及取引慣習

本品ノ製造ハ多クハ見込製造ニシテ時トシテ地方仲買業者ノ注文ニヨリ製造スルコトアリ而シテ製品ハ多ク地方仲買業者ニ販賣シ現金ヲ以テ直ニ其代金ヲ受取ルヲ例トシ地方仲買業者概ネ仕向先開屋ニ豫約販賣ヲ爲ス其現物仕送り後一週間以内ニ代金ヲ受取ノ例ニシテ約束手形等ノ取引ハ甚々稀ニシテ荷爲替ヲ取組ムコト亦甚少シ

(一〇) 相 場

明治三十九年ニ於ケル主産地蘇我町ノ平均相場ハ左ノ如シ

甘 薯 澱 粉	(一貫目ニ付)	金參拾五錢
馬 鈴 薯 澱 粉	(一貫目ニ付)	金四拾錢

(一一) 荷造法其費用並運賃諸費

一、甘薯澱粉ニ在テハ一貫五百目ヲ小箱ニ入レ釘打ト爲シ之ニ太繩ヲ掛ケ縦横ニ結束スルモノト十五貫目ヲ包裝紙ニ入レ更ニ之ヲ吹ニ納メテ荷締ヲ爲シ太繩ヲ以テ縦横ニ堅ク結束スルモノト二種アリ其費用ハ

第一種(二貫五百目入小箱ノモノ) 金拾錢

第二種(十五貫目入吹納ノモノ) 金拾八錢

二、馬鈴薯澱粉八十二貫目ヲ大箱ニ入レ釘打ト爲シ更ニ太繩ヲ以テ縦横ニ結束ス其費用金六拾錢ヲ要ス

次ニ千葉那蘇我町ヨリ東京市迄ノ運賃ハ左ノ如シ

甘薯ノ(一貫五百目入小箱ノモノ一個ニ付) 金七厘

同 (十五貫目入吹納ノモノ一個ニ付) 金三錢

馬鈴薯ノ(十二貫目入大箱ノモノ一個ニ付) 金四錢五厘

(一二) 長所、缺點並ニ改良スヘキ要點

本品ハ其品質ニ於テ北海道産其他ノモノニ比シ敢テ遜色ナシト雖モ晒シ方及乾燥方ニ付益々改良ヲ加ヘ色澤ヲ一層純白ナラシムルヲ要ス

(一三) 重ナル製造業者及仲買業者並販賣先ニ於ケル重ナル取扱商店

製造業者	(主産地千葉町及蘇我町ニ於ケル分)
千葉那蘇我町	新田庄八
同	大森半造
同	中村文四郎
同	布施安兵衛
同	大森權四郎
同	高橋豐吉

年	數	量	價	額
三十八年		一四三、八四九 ^圓		一〇四、五八〇 ^圓
三十九年		二七二、六六一		一三七、三六四

備考 三十八年以前ノ産額ハ詳カナラス

(二) 種類別

戸、障子及襖骨ヲ重ナルモノトス

(三) 主要産地

山武郡陸岡村及安房郡清澄山ヲ最モ主ナル産地トス今左ニ此主産地ニ於ケル製産ノ現状ヲ示セハ左ノ如シ

山武郡	製造戸數	職工
陸岡村外數ヶ町村合計	二十萬五千二百七十個	八萬二千六百圓
安房郡	製造戸數 六十六戸	職工 百五人
清澄山外數ヶ町村合計	産額 一萬二千八百七十個	價額 一萬五千四百六十圓

(四) 事業ノ沿革

今ヲ去ルコト凡百年前山武郡陸岡村ニ於テ埼玉縣川越ニ倣ヒ戸ノ製造ヲナセシニ始マリ之ヲ江戸ニ輸出セシニ需要漸次増加シ販路逐年擴張シテ遂ニ上總戸ノ名聲ハ川越戸ヲ凌駕シ益々進歩シテ今日ニ至レリ

(五) 製造戸數及職工數(三十九年末現在)

家内工業

製造戸數 三百九十一戸

職工數 (男 六百二十二 女 十二) 計 六百三十三人

(六) 製産ノ狀況

製造ハ家内の工業ニシテ主産地タル山武郡陸岡村及安房郡清澄山其他一部地方ノ製造業者ヲ除クノ外ハ大抵餘業トシテ從事スルモノトス而シテ往時運輸機關備ハラサル時ニアリテハ東京其他へ運搬不便ノ爲メ運賃嵩ミ利益少ナク販路狭少ノ状態ナリシカ其後鐵道開通シ運輸交通ノ便大ニ開クルニ從ヒ販路漸ク擴張シ近時ハ東京ノ問屋ヲ經テ滿韓ノ地方ニモ多少輸出セラル、ニ至リシト云フ特ニ又東京横濱等大會ニ於ケル人口ノ劇増ハ本品ノ需用ヲシテ益々増大ナラシメ産額年々遂フテ増進ノ傾キアリ

(七) 原料ノ需用供給

原料ハ主トシテ杉材ヲ用ヒ孰レモ地方産ノモノヲ用フ特ニ本品ノ主産地タル山武郡陸岡村地方及安房郡清澄山ハ木材ヲ以テ著名ナルヲ以テ原料ノ供給上ニ敢テ不便ヲ感セス

(八) 生産費及ヒ收益比較

一、上總戸生産費(主産地陸岡村ニ於ケル三十九年物十本ニ對シ)

金壹圓貳拾五錢	原料杉材代
金拾九錢	根切賃
金八拾參錢五厘	木挽賃
金四拾錢	建具職賃金
金四拾貳錢	運搬費
金拾五錢	雜費
千葉縣	

金四拾錢

手數料

計 金參圓六拾四錢五厘

收益比較

金四圓

戶十本販賣價格

内

金參圓六拾四錢五厘

生産費

差引

金參拾五錢五厘

益金

二、障子生産費

(主産地陸岡村ニ於ケル
三十九年物一本ニ對シ)

金七拾錢

原料杉材代

金拾貳錢五厘

根切賃

金參拾六錢五厘

木挽賃

金七拾參錢

建具職賃金

金參拾七錢

運搬賃

金拾五錢

雜費

金參拾錢

手數料

計 金貳圓七拾四錢

收益比較

金參圓

障子十本販賣價格

内

金貳圓七拾四錢

生産費

差引

金貳拾六錢

益金

(九) 販賣額及仕向先

主産地方ニ産出スル上總戸及障子ハ其産額ノ殆ント全部縣外ニ輸出シ縣内ノ需用ハ甚タ少ナシ而シテ其仕向先ハ東京ヲ第一トシ神奈川、茨城地方之ニ亞ク海外仕向先ハ滿韓特ニ仁川及大連地方ニシテ東京商人ヲ經テ輸出セラル、モ其額甚タ少ナシ

(一〇) 販賣手續及取引慣習

仕向先問屋ト大抵豫約販賣ヲ爲シ現物仕送り後一週間以内ニ製造者ハ問屋ニ到リ仕切代金ヲ受取ルヲ例トス但シ仕切代金ニ對シテハ手數料一割ヲ支拂フ尙ホ場合ニ依リ荷爲替ヲ取組ムコトナキニアラス

(一一) 相場(三十九年物一本ニ對シ)

上總戸

金四拾錢

障子

金參拾錢

(一二) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

四枚ヲ以テ一束トシ太繩ニテニヶ所ヲ堅束ス其費用及運賃ハ左ノ如シ

金拾錢

戶障子十本ニ對スル荷造代

金四拾錢

産地陸岡村ヨリ東京迄ノ運搬費

千葉県

竹行李ハ夷隅郡

(四) 事業ノ沿革

輸出品タル籠類、竹行李ハ孰レモ概近ノ發達ニ係レリ即チ籠類ハ明治三十六年八月印幡郡酒々井町ノ高須賀辰之助ナルモノ高須賀竹細工講習所ヲ開設シ香川縣丸龜市産出品ニ模倣シ輸出向各種籠類ヲ製作スルト同時ニ徒弟ヲ募リテ技術ノ講習ヲ爲シ傍ラ其製品ヲ當時開會中ナリシ米國聖路易市萬國博覽會日本喫茶店ニ送りテ之ヲ試賣セシニ良好ノ成績ヲ得タリ是レヲ以テ爾來其製産漸ク盛トナリ殊ニ日露戰役ニ際シ夷隅郡農會ニ於テ其管内ニ之レカ製作ヲ獎勵セシヲ以テ斯業益々發達シ産額著シク増加セリ輸出向竹行李ノ製造モ亦殆ント籠類ト其創始ノ時ヲ同フスレトモ其著シク發達セルハ日露戰爭當時夷隅郡農會ノ獎勵ニヨリ老川村ニ工場ノ起リシ以來製産漸ク盛ントナレリ而シテ其原料タル鈴竹ハ其地方ニ豊富ナルノミナラス本品ノ本場タル静岡地方産ニ比シ其質優良ニシテ細工上極メテ好適ナルカ故ニ將來益々盛大ナラントスルノ狀況ニアリ其他輸出向竹製品トシテハ竹籠、壁掛及團扇骨等十數年來京濱商人ヨリノ注文ニヨリ多少ノ産アリト雖モ其額僅少ニシテ將來發達ノ見込ミ充分ナラス

之ヲ要スルニ本縣ハ竹細工原料タル各種竹材ニ富ミ且ツ工賃低廉ナルヲ以テ前記輸出向各種竹製品ノ製作ニ好適セルノシナラス其技ニ於テモ亦漸ク精緻ヲ加ヘタルヲ以テ市場ニ好評ヲ博シ一時ニ數萬個ノ注文ヲ受クルニ至レリ然レトモ是等輸出品ヲ製造スル工場ハ概規規模小ニシテ資金亦豊カナラス爲メニ多數ノ注文ニ應スルヲ得サルノ狀況ナリ

(五) 製造戸數及職工數(二十九年未現在)

家内工業

製造戸數 千四百八十二戸

職工數 (男 千五百十五人 女 六百二十九人) 計 二千四百四十四人

工場作業

工場數 三ヶ所

職工數 五十一人

(六) 製産狀況

内地向普通竹器ハ家内工業即チ農家ノ餘業トシテ隨時製作セラレ海外輸出品ハ主トシテ職工及徒弟ヲ使用スル工場ニヨリテ産出セラル今三十九年ニ於ケル輸出向籠類及竹行李ノ二種ニ付各工場別ニ其産額ヲ示セハ左ノ如シ

籠類	清海工場	櫻組工場	老川工場	計
竹	九七三、三二〇	四五〇、〇〇〇	一、二五二、二五〇	一、四三三、三二〇
行李			一、二五二、二五〇	一、二五二、二五〇

普通品即チ籠、籠等ハ往時ヨリ多少ノ産出アリテ漸次發達シ來リシモ近時其原料タル若竹ノ價格頻リニ騰貴セルノミナラス仲買業者間ノ競争漸ク甚クシク爲メニ漸次製品ノ價格ヲ低下セシムルヲ以テ製産益々減退セントセリ

(七) 原料ノ需用供給

- 一、其普通ノ竹細工物ハ其原料ハ大抵若竹(マタケ)ニシテ縣下所ニ産出ス
- 二、輸出向特製品タル籠類ノ原料ハ二種アリ則チ器具及飲食器類ヲ製作スルニハ若竹ニテ六寸以上ノモノヲ使用シ現今流行ノ牡丹籠其他ノ花籠類ヲ製作スルニハ女竹ニテ三寸以上尺内外ノモノヲ使用ス
- 三、同竹行李ノ原料ハ鈴竹ト稱スルモノニシテ其質ハ柔軟ニシテ光澤ヲ帶ヒ夷隅郡地方ヨリ産出ス

四、團扇骨ノ原料ハ安房及上總地方ニ産出スル女竹ヲ用ヒ又籐類ニハ主トシテ若竹ヲ使用ス
 以上各種ノ原料中鈴竹ヲ除クノ外ハ生産區域廣大ナルヲ以テ目下ノ處供給上ニハ別ニ不便ヲ感セス
 (八) 生産費及ヒ收益比較

一、輸出向小籠類一個ニ付(四十年印幡郡佐倉町櫻組工場調)

收入	販賣價格(小籠一個ニ付)
金一參錢	
支出	
一金壹錢九厘	
內	原料竹代
金三厘	繪具代
金五毛	工賃
金六厘	仕揚代
金八厘	紙代
金壹毛	荷造費及運搬費
金壹厘四毛	
差引	益金
金壹錢壹厘	
二、竹行李	

本品ニ對スル生産費及收益ノ比較計算ニ就テハ詳細ニ之レヲ知ルヲ得サリシモ其大要ヲ示セハ左ノ如シ

金參拾五錢	竹行李一個ノ仕上代
金拾錢	原料竹代
計 金四拾五錢	
三、笹 壹斗五升入米笹拾個ニ付(三十九年)	
收入	
一金壹圓貳拾五錢	米笹拾個茂原町ニテ販賣價格
支出	
一金壹圓五錢	
內	原料竹代
金五拾錢	職工賃(竹割其他ノ手間約二人分)
金五拾錢	主産地方ヨリ長生郡茂原町迄運送賃
金五錢	
差引	益金
金貳拾錢	

(九) 販出額及仕向地

欲其他ノ普通製品ノ販出額ハ其種類多クシテ確實ナル統計ヲ得ル能ハサレトモ産額ノ最モ多量ナル笹籠類ハ約七八分ハ縣内ノ需用ニ供セラレ餘ハ仲買業者ノ手ヲ經テ京濱間へ輸送サル、モノノ如シ

又輸出向特製品中籠類竹行李及籐團扇骨等ハ其産額ノ殆ント全部横濱ヲ經テ海外ヘ輸出セラル

(一〇) 販賣手續及取引慣習

輸出向竹細工物ハ見本ヲ仲買業者又ハ取扱商店ニ送り注文ヲ受クルトキハ價格及送品期日ヲ約定スルヲ普通トス而シテ現物送付後登週間以内ニ其代金ノ仕拂ヲ受クルヲ例トス

(一一) 相場

明治三十九年及四十年ニ於ケル平均相場ハ左ノ如シ

第一、輸出向籠類(佐倉町櫻組工場調)

- 一 夏目、南京、天丸、地球、献上、三ッ組鍋籠、丸達摩、小鉢及小鏡、小櫻ノ類ハ壹個ニ付金貳錢乃至參錢
- 一 四季籠、グルス籠、黒靴ノ類ハ壹個ニ付金八厘乃至壹錢五厘
- 一 五ッ組麵包入籠ハ壹個ニ付金拾五錢
- 一 信玄籠、提籃籠、草花生籠ハ壹個ニ付金七八錢乃至貳拾錢

第二、竹行李(老川村竹行李工場調)

- 一 大角(三ッ組) 壹個ニ付 金壹圓貳拾錢
- 一 大々角(三ッ組) 同 金貳圓拾錢
- 一 並角(三ッ組) 同 金九拾錢
- 一 小袖(三ッ組) 同 金壹圓參拾五錢
- 一 洋服入 同 金壹圓

第三、笥及籠(長生郡茂原町相場)

- 一 罫紙入 同 金貳拾錢
- 一 辨當入 同 金五錢
- 一 一米笥 壹個ニ付 金七錢
- 一 一奥釣笥 同 金八錢
- 一 一鰻笥 同 金貳錢三厘
- 一 一蘭籠 同 金七錢
- 一 一飯笥 同 金拾參錢

(一二) 荷造法其費用並運賃諸費

荷造ハ東京市迄ノ仮荷造ニシテ先ツ直徑二尺五寸高サ三尺位ノ大籠ニ新聞紙ヲ敷キ其内ニ約千貳百個ヲ入レ外圍ハ蓆包ト爲シ太細ヲ以テ縦横四ヶ所ヲ結束ス而シテ荷車及流車積ニテ輸送ス左ニ其荷造費及運賃ヲ示ス

一金參拾七錢

荷造諸費

内譯

- 金貳拾五錢 犬籠壹個代
- 金九錢 蓆三枚代
- 金貳錢 太細及古新聞代
- 金壹錢 手間代
- 一金六拾參錢 運賃諸費

千葉縣

内 譯

金五錢

佐倉町ヨリ佐倉停車場迄荷車代

金參拾錢

佐倉停車場ヨリ兩國停車場迄瀧車賃

金貳拾八錢

兩國ヨリ京橋區銀座通迄荷車代

夷隅郡ニ産出スル輸已向籠及竹行李ヲ京濱間ニ送荷スルニハ同郡清海村與津港ヨリ直ニ汽船便ヲ以テスルニヨリ其運賃ハ佐倉町ノ夫ニ比シ甚ク低廉ナリ

(二三) 重ナル製造業者及取扱商店

製造業者

一、輸已向籠類

印幡郡佐倉町櫻組工場

(業主 福田喜久)

同

夷隅郡清海村清海竹器工場

(主幹 雉島雅司)

一、竹行李

夷隅郡老川村老川竹器工場

(主幹 永島佐十郎)

取扱商店

東京市京橋區銀座

大庭寛

同

佐藤合資會社

同

帝國五二館

同

東洋館

其他市内ノ

各商店

横濱市翁町

川端彦三郎

同

松影町

野澤組

北海道小樽港

石井商店

靜

岡

縣

静岡県

○産業概況

静岡県ハ伊豆、駿河、遠江ノ三國ヲ管シ一市十三郡ニ分轄ス其總面積四百九十二方里南ハ一帯太平洋ニ面シ中腹ニ駿河灣ヲ抱擁シ地形東西ニ長ク南北ニ狭シ北ハ山岳連亘シ其脈國中ニ起伏スルヲ以テ平坦ノ地少キモ南部一帯ハ地味膏腴ニシテ農産ニ富ミ沿海漁鹽ノ利亦少カラズ遠江國モ亦其ノ北境ハ山岳重疊所謂赤石山系ヲナシ林産物ニ富ム中部ニハ牧ノ原、三方ヶ原等ノ曠野アリ地勢概シテ平坦ナルヲ以テ能ク農耕ニ適セリ御前崎ハ南方海中ニ斗出シ駿河灣ト遠江灘トヲ劃シ其沿岸漁利ニ乏カラス

本縣ノ交通機關トシテハ官線東海道鐵道要部ヲ貫通シ其延長百二十哩アリ又伊豆三島町ヨリ大仁ニ達スル十哩餘ノ鐵路アリ以テ交通運輸ノ便ヲ與フ又本縣ニハ富士、安倍、大井、天龍ノ四大川及濱名湖アリ何レモ舟楫ノ便アリ港灣トシテ著名ナルハ清水、下田ノ二港ニシテ就中清水港ハ縣下唯一ノ貿易港ニシテ三保崎遠ク海中ニ斗出シ風浪ヲ遮リ天然ノ良港灣ヲ成セリ且該港ハ横濱神戸兩港ノ間ニ在リテ東海道ノ要路ニ當リ能ク大船巨船ヲ碇繫シ得ラル、ノミナラス東海道鐵道ニ依リ海陸接續ノ利便ヲ有スルヲ以テ外國貿易港トシテ前途有望ナリト雖モ目下一ノ燈臺ナク加之海陸荷役設備ノ頗ル不完全ナルハ惜ムヘシトナス

静岡市ハ縣廳所在地トシテ其繁華固ヨリ縣下各郡ニ冠絶スト雖モ商工業ノ盛ナルハ濱松町ヲ以テ第一ニ推サル、ヘカラス聞ク所ニ依レハ静岡停車場ヨリ一ケ年輸出セラル、貨物ノ價額ハ凡六百萬圓位ニ過キサレトモ濱松驛ノ輸出額ハ約二千五六百萬圓ニ上ルヘシト云フ本縣ノ輸出農産物タル落花生、生姜、絲瓜、蕃椒ノ如キ亦濱松町ヲ以テ主タル集散地トナセリ

明治三十九年ノ統計ニ基キ本縣ノ生産總額ヲ擧クレハ左ノ如シ

農 産	三二、八四三、七八四
工 産	二六、二〇一、二八二
水 産	四、二三五、六〇六
林 産	三、四一五、九七〇
礦 産	七四七、〇四〇
畜 産	五五四、一六〇
計	六八、〇九七、八四二

以上生産額ヲ對照スレハ農産其首位ヲ占メ工産之ニ次キ水産林産又之ニ次ク礦産ト畜産トハ其産額尙ホ比較上頗ル少額ナリ而シテ農産ハ總額ノ約五割ヲ占メ工産ハ同四割ニ當リ他ノ四種ハ僅ニ同一割ニ當レルノ有様ナルヲ以テ縣經濟上ノ基礎ハ農産ト工産トノ收益ニ賴ラサルヘカラス是ヲ以テ縣ニ於テモ專ラ農工業ノ獎勵ニ努メ之カ改善進歩ヲ圖ルト共ニ亦水産林産等ノ産額増進方法ヲ講シツ、アリ農産ハ總額三千二百八十四萬三千七百八十四圓中其主要ナルモノハ米麥トス特種農産物トシテハ繭、茶、落花生、柑橘類等ヲ産出シ其他各種ノ副産物アリテ農家經濟ヲ助クルコト少ナカラス而シテ農業ニ就テハ當業者ニ於テ銳意改良ノ方法ヲ講スルノミナラス縣郡町村農會等ノ機關アリ又縣ノ施設トシテハ農學校、農事試驗場ノ設ケアリ農業教育ノ發達並ニ種子及耕作法等ノ改善ヲ圖リ且耕地整理ノ普及、害蟲驅除豫防ノ勵行ニ努メツ、アルヲ以テ其生産力ハ逐年増進ノ趨勢ヲ示セリ

本縣ノ沿海線ハ其延長百三十里ニ亘リ頗ル魚族ニ富メリ漁獲物ノ主ナルモノハ鰹、鰯、鯖等ニシテ就中鰹ヲ第一トシ殊ニ鰹節ノ如キハ各地市場ニ聲價ヲ博シ其需要益増加ノ傾アリト云フ本縣水産物ノ産額ハ現時ニ於テハ四百三十三萬餘圓

ニ過キサレトモ縣水産試驗場ニ於テ淡水魚ノ養殖、並ニ遠洋漁業ノ方法等ヲ示シ斯業ノ發達ニ努力シ居ルヲ以テ將來尙ホ大ニ増加ヲ見ルニ至ルヘシ

林産物ハ杉材、松材等ヲ其主ナルモノトシ副産物トシテハ木炭、推茸等ヲ出ス近時官民トモ大ニ山林ノ利用ノ留意シ之カ注意ヲ怠ラサルヲ以テ本類モ亦漸次産額ノ増進ヲ見ルニ至ルヘシ

礦産ハ古川合名會社ノ經營ニ係ル磐田郡佐久門村久根銅山産出ノ銅ヲ以テ最トス該礦區ハ二十五萬六千五百二十坪アリテ盛ニ採掘シツ、アリ之ニ次キ規模ノ大ナルモノハ黒瀧長次郎經營ノ加茂郡下河津村全礦ニシテ其他尙ホ小規模ノ採掘少カラス

畜産業ハ農家ノ副業ニシテ現時牛一萬四千四十四頭馬一萬四千九十九頭ニ達シ逐年盛況ニ向ヒツ、アリ縣ニ於テハ種牡牛馬ヲ購入シテ之ヲ貸付シ或ハ獎勵金ヲ下付シテ之カ蕃殖ヲ圖リツ、アリ

本縣ノ工産物ハ一ヶ年ノ産額既ニ二千六百萬圓ニ達シ尙ホ漸々トシテ發達ノ勢アリ想フニ農産ト均等ノ生産額ニ達スルノ期亦遠キニアラサルヘキカ今明治三十九年中ニ於ケル各種工産品ノ産額ヲ示セハ左ノ如シ

工産品種類及産額

前記工産物中其産額百萬圓以上ニ達スルモノハ再製茶、西洋紙、生絲、紡績、綿絲、織物、酒ノ六種ニシテ此内再製茶ハ純然タル海外輸出品ニシテ生絲、西洋紙、紡績綿糸等亦多少外國ニ輸出セラル之ニ次キ百萬圓以上ノモノハ煉瓦及ヒ瓦、醬油、和紙、漆器、砂糖、蠟表及莫厘、形染布、藥品、帽子、竹製品、絹製手巾、油類、燐寸、木製品ノ十四種ニシテ此内漆器、竹器、絹製手巾、藥品ノ如キハ主ナル輸出品トス

再製茶ハ本縣工産物中ノ第一位ヲ占メ其海外ヘノ輸出額ハ約一千萬斤ニシテ全國茶ノ輸出額ノ約三分ノ一ニ當レリ本縣ニ於ケル茶ノ産地ハ殆ント全縣下ニ亘レリト雖モ就中最モ多ク産スルヲ榛原郡牧野原及金谷附近并ニ磐田郡中泉、見附

近傍トス本縣製茶ハ從來横濱及神戸ニ於テ再製ノ上海外ニ輸出セラレタリシカ近時静岡其他ノ各地ニ再製工場ノ設置ヲ見ルニ至リ之ト同時ニ直接清水港ヨリ輸出セラル、モノ漸次多キヲ加フルニ至レリ試ニ大藏省ノ貿易年表ニ依リ之ヲ見レハ横濱港ニ於ケル茶ノ輸出額ハ明治三十六年ニ於テハ九、〇五〇、八七三圓ナリシニ四十年ニハ五、八二六、六五九圓ニ減セルニ之ニ反シ清水港ニ在リテハ三十六年ニハ僅ニ三三八、〇六四圓ナリシカ四十年ニハ二、六八二、六九一圓ニ増加スルニ至レリ清水港ニハ外國航船トシテ日本郵船株式會社汽船ノ定期寄港スルノミナリシカ製茶輸出ノ時期ニ於テ加奈陀鐵道汽船會社汽船ノ寄港ヲ見タリ

此ノ如ク本縣ノ製茶カ直接清水港ヨリ輸出スルニ至リタルニ就テハ之カ爲メ横、神兩港ニ於ケル製茶輸出ノ上ニ多少ノ影響ヲ及ホスヘク殊ニ其影響ハ横濱港ニ於テ殊ニ甚シカルヘク今後清水港ニ於ケル諸般ノ設備完成スルニ至ラハ横濱港ニ於ケル製茶貿易ハ漸次該港ニ移ルニ至ルヘシト云フ

●紙類ノ明治三十九年中ニ於ケル産額ハ洋紙四百四十六萬一千三百八圓、和紙七十二萬〇三百五十三圓合計五百十八萬一千六百五十一圓ニ達セリ洋紙ノ種類ハ印刷用紙、板紙、新聞用紙、色紙、教科書用紙、燐寸箱用紙、連史紙二番唐紙等ニシテ板紙ハ清國及孟買等ニ輸出セラレ連史紙、二番唐紙ハ専ラ清國ニ輸出セラル而シテ此等ノ洋紙類ハ富士製紙株式會社第一、第二工場、王子製紙株式會社氣田分工場、同中部分工場、四日市製紙株式會社芝川分工場等ニ於テ製造セリ又原田製紙株式會社ニ於テハ既ニ使用ニ堪ヘサル故漁網ヲ原料トシ歐米輸出向ナフキン并ニ清國向連史紙ヲ製造セリ紙ノ種類ハ美濃紙、半紙、烏ノ子紙等ニシテ美濃紙最モ多ク半紙之ニ次ク現今製造セラル、半紙ハ古來本縣ノ特産タル駿河半紙ヲ改良シタルモノニシテ該半紙ハ當初高知縣ヨリ輸入セシカ其需要ノ増加スルニ隨ヒ江尻近傍ニ於テ盛ニ製造セラル、ニ至レルナリ鳥ノ子紙ハ庵原郡入江町太田製紙場、安倍郡大里村三立商會等ニテ製造ス其生産額ノ過半ハ清國並ニ歐洲諸國ニ輸出スト云フ

和紙ノ産地ハ庵原郡ヲ第一トシ安倍郡、富士郡之ニ次ク全縣下産額ノ中庵原郡ノ産額ハ百分ノ四十、安倍、富士兩郡ノ産額ハ百分ノ三十二當リ其他各郡ノ産額百分ノ三十二當ル割合ナリト云フ

和紙ノ主タル原料ハ三樞ニシテ該樹ハ茶ノ間作トシテ之ヲ栽培シ賀茂、田方、駿東、富士、庵原、安倍、志太、磐田各郡ニ産出スレトモ近來印刷局其他各地ニ於ケル製紙原料トシテ輸出セラル、モノ多キ爲メ其供給充分ナラス山陰地方並ニ高知縣ヨリ輸入シ以テ之ヲ補ヘリ又近來外國輸入ノ「ツードバルプ」ヲモ併用セリ栲モ亦庵原、磐田其他ノ各郡ニ産出スレトモ之ヲ原料トシテ製セシ紙類ハ其産額極メテ少ク原料ノマ、岐阜其他ノ地方ニ販出セリ

生絲ハ賀茂、田方、駿東、富士、庵原、榛原、磐田、小笠、濱名ノ各郡ニ於テ之ヲ産出ス本品ノ三十九年中ニ於ケル産額ハ三百七十九萬五千三百八十五圓ニシテ其大部分ハ輸出トス

本縣ノ織物ハ重ニ綿織物ニシテ其三十九年中ニ於ケル産額ハ二百六十九萬四千二百九十圓ナリ綿織物ノ種類ハ縞木綿、白木綿、淺黃木綿、紺木綿等ニシテ縞木綿最モ多ク殆ト總額ノ七割ヲ占ムト云フ本類ノ主産地ハ濱名郡ト磐田郡ノ一部(天龍川以西)トニシテ濱松、天龍川兩驛ヲ經テ各府縣ニ販出ス本縣ノ綿織物ハ其縣内ノ需要ニ供セラル、モノハ約一割位ニ止マリ餘ハ皆各地方ニ販出シ其産額年々増進セリ

●形染布ハ濱名郡馬村日本形染株式會社ニ於テ製造ス同會社ハ明治三十三年四月ノ創立ニシテ從來内國向中形ノミヲ染出セシカ三十八年六月ヨリ始メテ外國輸出向ヲ染出スルニ至レリ輸出向ハ無地染ヲ主トシ形染ハ全輸出額ノ四分ノ一ニ過キスト云フ輸出先ハ清國ニテ殊ニ滿洲地方ヲ主トス輸出向無地染ハ一尺二寸巾五丈物、形染ハ一尺三寸巾四丈物ニシテ原料布ハ會社所在地附近産白木綿ヲ使用セリ會社富士紡績會社製「シーチング」ヲ染メ輸出セシモ原料布ノ地質粗疏ナル爲メ賣行ナカリシヲ以テ中止セシカ若シ品質良好ナル「シーチング」ヲ染色シ輸出セハ需要多カルヘシト云ヘリ明治三十九年中ニ於ケル同會社形染布ノ製造額ハ内國向三十四萬七千反輸出向十四萬五千反此價額合計五十九萬八千圓ナリ紡

績綿糸ハ駿東郡小山富士瓦期紡績會社工場ニ志太郡島田町島田紡績會社ニ於テ製造ス其産額ハ前掲ノ如ク百四十二萬圓ニ及フト雖モ海外輸出ハ極メテ少ク主トシテ内地向ヲ製出セリ

本縣ハ廉價ナル漆器ノ製造地トシテ名アリ隨テ外國輸出向漆器製造ノ盛ナルハ全國中其比ヲ見サル所ナリ試ニ三十九年ニ於ケル製造額中外國向ハ七割五分ニ上リ内國向ハ僅ニ二割五分ニ過キスト云フ但從來價格ノ低廉ヲ主トシテ多ク粗製品ヲ出セルヲ憾トス本縣漆器ノ種類ハ臘色、木地臘塗、色漆研出シ、透繪、蒔繪、及ヒ金色塗ニシテ輸出向ハ色漆物最モ多ク透繪之ニ次ク近時茅、襪襦、蠟表扇等ヲ用キテ漆地(漆器漆ト名ク)ヲ製造スル者アリ之ヲ用キテ製シタル漆器ハ堅牢ニシテ木材漆器ノ如ク空氣ノ乾燥ノ爲メ龜裂ヲ生スルカ如キコトナク頗ル便益ノモノナリト云フ

樂器ノ種類ハ風琴ト「ピアノ」ノ二種ニシテ濱松町日本樂器製造株式會社ニ於テ製造ス三十九年中ノ製造價額ハ三十萬圓ニシテ海外輸出額ハ其三分ノ一ニシテ輸出先ハ清韓地方、印度、濠洲、新嘉坡等ニシテ清國最モ多シ輸出向ハ主トシテ風琴ニシテ「ピアノ」ハ極メテ少シト云フ

竹細工品ノ種類ハ行李、帽子、笈、家形、菓子器、盆、果物籠其他器具類ニシテ竹行李ハ富士郡ヲ主産地トシ其他ノ種類ハ静岡市及駿東、志太ノ二郡ニ於テ之ヲ製造ス帽子及笈ハ二十三年前ニハ一時多額ノ海外輸出ヲ見タリシカ其後大ニ衰退セリ現時輸出セラル、モノハ字形、手袋入、手巾入、菓子器、菓物籠等トス其三十九年中ニ於ケル産額ハ十七萬二千七百三圓トス

○重要輸出品調

(一)再製茶

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
(二) 種 類	明治三十七年	一八、七四七、〇六〇 _斤	六、三七五、八七五 _圓
	同 三十八年	一五、〇六四、七四二	五、〇六四、七六六
	同 三十九年	一五、四九四、二四一	五、〇六八、一六六

(二) 釜茶、籠茶

(三) 生 産 狀 況

再製茶ハ普通製茶ヲ更ニ再製機ヲ以テ精製シ海外輸出ノ用ニ供ス

(四) 主 要 産 地

静岡市、榛原、志太、小笠ノ三郡ヲ最トス

(五) 原 料 需 要 供 給

原料ハ普通ノ製茶ナルヲ以テ本縣生産ノモノヲ使用シ製茶時期ニ此原茶ヲ購入シテ再製業ニ着手ス

(六) 輸 出 上 ノ 諸 費

再製費百封度ニ付金二圓三十四錢六厘荷造費百封度ニ付金二圓八十九錢四厘以上ハ工場ノ經營原茶買入直段等ノ爲

メ各等差アリテ一定セス静岡市所在ノ各工場ノ平均ニ依リテ算出ス

(七) 輸 出 先

再製茶ハ米國及加奈太ノ二國ニ向テ輸出ス今兩國ノ輸入商及卸賣商ノ重ナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

輸 入 商	
市 俄 古	ゴツドリープ水谷商會
同	ゼークス商會
同	ホイットニー商會
紐 育	古 谷 商 會
同	ゴツドリープ水谷商會
同	日本製茶輸出會社
桑 港	富士合資會社
モントリオル	西 村 商 會
卸 賣 商	
市 俄 古	スプレグウィナー商會
同	イービーミラー商會
同	レンロー商會
同	リードムルドック商會
同	其 他 十 餘

紐 育	ジョンズ兄弟商會
同	太平洋太西洋貿易商會
同	其 他
桑 港	ブランデンスティン商會
同	シリング商會
同	ヒル ス 商 會
同	フォールチャー商會
同	マカンドレー商會
同	其 他 十 餘
モントリオル	ハン ト 商 會
同	バナード商會
同	スミスベーカー商會
同	カーターメーシイ商會
同	ヘ リ ア 商 會
同	其 他 十 餘

(八) 主ナル製造業者

再製茶ハ會社及個人ノ經營事業ニシテ其工場ノ主ナルモノハ大略左ノ如シ

静岡市北番町 富士合資會社

同 應匠町二丁目	東陽製茶株式會社
同 北番町	静岡製茶合資會社
同 安西	日本製茶株式會社静岡支店
同 安西一丁目	日本製茶合資會社
同 安西	ヘリヤ商會支店
同 二番町	森 商 會
同 安西三丁目	上 田 商 店
同 安西	成 岡 甚 之 丞
同 安西一丁目	吉 川 國 太 郎
同 安西二丁目	望 月 豐 吉
同 宮ヶ崎町	野 崎 紋 次 郎
同 安西一番水道	堀 内 由 次 郎
安倍郡清水町	駿 靜 製 茶 合 資 會 社
志太郡藤枝町	清 水 製 茶 合 資 會 社
同	東 海 製 茶 貿 易 會 社
同 島田町	笹 野 德 次 郎
同	島 田 再 製 所
同	島 田 製 茶 株 式 會 社

(二) 西 洋 紙

(一) 產 額	年 年
全	明 治 三 十 七 年
全	三 十 八 年
全	三 十 九 年

價 額
三、三三四、三〇二
三、七二〇、〇一五
四、四六一、三〇八

同 岡部町	駿 岡 社
榛原郡吉田村	中 村 圓 一 郎
同 勝間田村	牧 之 原 製 茶 株 式 會 社
同 金谷町	村 松 多 次 郎
小笠郡西方村	富 士 合 資 會 社 支 店
同 掛川町	小 笠 製 茶 株 式 會 社
同	掛 川 製 茶 再 製 所

(二) 種 類 新聞原料紙及清國輸出連史紙其他

(三) 主 要 產 地

富士郡鷹岡村ニ富士製紙會社アリ全郡芝富村ニ四日市製紙會社アリ磐田郡氣多村及中部村ニ王子製紙會社工場アリ

テ盛ニ製造シツ、アリ

(四) 製造戸數及職工數

工場

六戸

職工

一千二百三十四人

内

男工

八百九十一人

女工

三百四十三人

(五) 原料需要供給

原料ハ襪襖、木材、稻藁其他ニシテ全國各地ヨリ集收ス

(六) 相場

印刷紙ボール板紙其他種々アリテ一定セスト雖平均一封度ニ付金六錢内外ノ賣價ナリ

(七) 輸出及販賣手續

製紙ハ一旦東京及横濱神戸等ニ輸送シ全地ヨリ米國及清國等ニ輸出シ内地用ハ東京大阪等ニテ賣捌クヲ例トス

(三) 生絲

(二) 産額

年次

價額

明治三十七年

二、八五八、六〇二^円

同 三十八年
同 三十九年

二、七三七、七〇七
三、七九五、三八五^円

(二) 主要産地

賀茂、田方、駿東、富士、庵原、榛原、磐田、小笠、濱名ノ九郡ナリトス

(三) 製造戸數

器械

八十四戸

内

五十人繰未滿

二十八戸

百人繰未滿

四十一戸

百人繰以上

十五戸

座繰

四百四十七戸

内

十人繰未滿

四百十五戸

五十人繰未滿

三十一戸

百人繰未滿

一戸

玉繰

九百戸

内

十人繰未滿

八百九十二戸

静岡県

五十人繰未滿
百人繰未滿

六戸
二戸

(四) 生産ノ狀況

三十八年ハ春蠶期ノ五齡中霖雨ニ際シ圓滿ノ收繭ヲ得ス隨テ解舒不良ナリ三十七年ニ比較スルニ約一割ヲ減ス三十九年ハ之ニ反シ氣候適順ナリシモ蠶蛆ノ被害尠カラス然レトモ解舒良好ナリシヲ以テ之ヲ三十八年ニ比スルニ製造戸數ハ減スレトモ産額ニ於テ約二割六分ノ増額ヲ見ルニ至レリ

(五) 原料需要供給

本縣ノ製絲需要繭ハ其産額ノ大部分ニ達シ他府縣ニモ販出スル額尠ナカラス是レ成繭ノ早場ナルヲ以テナリ而シテ幾分ハ茨城、千葉、愛知、宮城ノ諸縣ヨリモ購入ス
其賣買手續ハ製絲家カ養蠶家ヨリ直接購買スル者ハ極メテ尠ク中買業者ノ手ヲ經ルモノ十中ノ七八ヲ占ム又其取引ハ生繭十分ノ九ヲ占メ乾繭ノ如キハ極メテ僅少ナリ

(六) 製産費

生糸百斤ノ製造費 約貳百圓
同 原價 約九百圓
同 賣價 約千五百圓

(七) 販出額及仕向地

前記生糸ノ大部分ハ輸出向ニシテ横濱ニ販出セラル

(八) 販賣手續キ取引習慣

工場組織ノモノハ直接横濱生糸商人ニ賣込ミ其他ハ仲買人ニ賣込ミ仲買人ハ之ヲ取經メ横濱又ハ他地方ニ販出スルモノ、如シ

(九) 荷造法其費用並運賃

一紐ノ重量ハ約九匁、二紐ヲ合シテ一本ノ捻糸トシ三十本ヲ一括トシ十五括ヲ一捆トス一括毎ニ帶紙商標ヲ付シ強靱ナル厚紙ニテ包ミ箱ノ内部ハ桐油紙、外部ハ莖包トス其荷造費用ハ一捆約一圓三三錢運賃横濱迄一圓五六錢ヲ要ス

(十) 重ナル製造業者

賀茂郡中川村	依田佐二平
田方郡三島町	河島新兵衛
駿東郡原里村	勝又磊三
富士郡大宮町	久保田福次郎
同	輝岳製糸會社
同 今泉村	井毛源策
庵原郡富士川町	影山熊吉
榛原郡金谷町	伊藤仙太郎
小笠郡大須賀村	清水孝一郎
磐田郡下阿多古村	阿多古製糸會社
濱名郡小野田村	横田保

(四) 織物

同	北庄内村	佐藤彌七
同	吉津村	宮崎柳吉
同	知波田村	杉浦義太郎

(二) 産額

年次

價額

明治三十七年	七〇二、〇二〇
同三十八年	二、〇二九、四二六
同三十九年	二、六九四、二九〇

(三) 種類

縞木綿及白木綿

(三) 主要産地

濱名郡及磐田郡

(四) 製造戸數及職工數

工場	三千二百十二戸
職工	四千〇三十八人
内	

(五) 製産狀況

男工	二百三十五人
女工	三千九百十四人

綿布製織ニ專業ト兼業トアリ專業者ハ數十臺ノ機械ヲ据エ付ケ工女數十人ヲ使用シテ製織スルモノ六七百名其他ハ皆兼業者即チ農家ノ副業トシテ製織シ自家用ヲ目的トシ時ニ賃織ヲナスモノアリ

(六) 原料需要供給

原料ノ供給ハ數年來紡績業ノ進歩ニ從ヒ紡績綿布ヲ用ユルモノ十中ノ八九ヲ占メ大阪及名古屋等ヨリ輸入ス

(七) 販出額及仕向地

綿布ノ販路ハ東海道筋及關東各地方ヨリ東北各府縣甲信各地并ニ北海道韓國臺灣等ニ及ヒ其需要日ヲ追テ擴張シツ、アリ今明治三十七年ヨリ三十九年ニ至ル三ケ年間濱松驛積出シノ綿布數量ヲ示セハ左ノ如シ

明治三十七年	六百四十六噸
同三十八年	百六十三萬八千百十九斤
同三十九年	三百七十七萬三千〇四十三斤

(八) 販賣手續及取引習慣

販賣手續ハ織物仲買人ナルモノアリテ各生産者若クハ機織家ヨリ買入レ之ヲ各大販賣店ニ賣込ミ販賣店ハ之ヲ各地太物商ニ販賣スルモノニシテ現金取引トノ二種アリ

(九) 相場

平均相場一反ニ付金壹圓五拾錢

(十) 荷造方法並ニ運賃

總テ函入トナシ帶鐵ヲ以テ卷ク荷造費ハ一反ニ付金三錢運賃一反ニ付金二錢八厘ヲ要ス

(五) 紡績綿糸

(二) 産	年次	價額
(一)	明治三十七年	一、〇二三、五一〇 ^円
	同 三十八年	一、二九七、〇五二
	同 三十九年	一、四二三、八七二

(三) 種類 十六番手ヨリ四十二番手迄

(三) 主要産地

駿東郡六合村小山及志太郡島田町トス

(四) 製造戸數及職工數並ニ動力

箇所	二
職工	三千百十一人
原動力	水力
一日使用馬力	一千〇四十八馬力

(五) 製産ノ狀況

駿東郡六合村小山ニ富士瓦斯紡績會社アリ志太郡島田町ニ島田紡績會社アリテ盛ニ製造ニ從事シツ、アリ

(六) 原料需要供給

原料棉花ハ埃及綿及米國棉孟買、支那其他ヨリ供給ヲ仰ク

(七) 相場

十六番手一捆	百七十圓
二十番手一捆	百二十七圓
四十番手一捆	二百二十五圓

(八) 輸出ノ狀況

綿糸ノ輸出ハ數量極メテ少ナキモ内地ノ仕向先ハ東京、大阪、一ノ宮地方ナリトス

(六) 和紙

(二) 産額

年次	價額
明治三十七年	六九一、六七二 ^円
同 三十八年	六七一、六九一
同 三十九年	七二〇、三五三

(三) 種類

静岡県縣

美濃紙、半紙、半切、左束、薄葉、雁皮紙、烏ノ子等ナリ

(三) 主要産地

安倍、庵原、富士ノ三郡ヲ最トス

(四) 製産状況

和紙ハ重モニ農家ノ副業ニシテ工場ノ主ナルモノハ安倍郡大里村ニ三立商會アリ庵原郡入江町ニ太田製紙工場アリテ盛ニ局紙ヲ抄造シ清國等ニ輸出セリ

(五) 原料需要供給

三椏ハ縣内伊豆及高知縣ヨリ輸入シ晒粉ハ海外輸入品ヲ用ヒ黄鼠葵ハ縣内ヨリ産出ス

(六) 製造費及收益ノ比較

原料ノ高價ニ趣クト人夫賃銀ノ高騰トニ依リ一般ニ利益薄キカ如シ

(七) 相場

一捆ニ付美濃紙二圓四十錢、半紙二圓、左束二圓三十錢、半切九十五錢ナリ

(八) 輸出及販賣手續

輸出方法ハ地方仲買ノ手ヲ經テ重ニ北越京阪等ニ販出ス

(九) 荷造法及其費用

荷造資ハ一捆ニ付金十錢内外ヲ要ス

(七) 漆器

(一) 産額

年次

價額

明治三十七年

四九四、五〇〇^円

同 三十八年

六一九、〇八六

同 三十九年

六七六、一五七

(二) 種類

裝飾品、家具、飲食器、其他

(三) 主要産地

静岡市濱名郡濱松町及庵原郡蒲原町トス

(四) 製造戸數及職工

工場

七百二十八戸

職工

二千三百七十六人

(五) 製産状況

本年ハ戦後ニ引續キ海外輸出額著シク増加シ且内地向モ隨テ好況ニシテ前年ニ比シ一割餘ノ増加ヲ示セリ

(六) 原料需要供給

木材、漆液、金銀鋳等ノ原料ハ前年ニ比シ約五分ノ高價ヲ示セルモ生産品ノ販路擴張ト其價格ノ高騰ニ伴ヒ自然需要供給上敢テ困難ヲ感スルコトナカリキ

(七) 製造費及收益ノ比較

販出額六十七萬六千五百五十七圓ニ對シ收益十萬千四百三十三圓五十五錢ニシテ即チ一割五分ノ利益ヲ見ル
製造費ハ前記産額ニ對シ五十七萬四千七百三十三圓四十五錢ヲ要シタリキ

(八) 相場

各種類ニ對シ一々列舉スルコト能ハサルモ前年ニ比シ約一割ノ騰貴ヲ爲セリ

(九) 輸出及販賣手續

海外輸出品ハ横濱及神戸ノ外國商館ニ直接賣込且同地ノ賣込問屋ニモ販賣ス内地向ハ東京、大阪ノ各問屋ヲ經由シ
テ東西ニ販路ヲ有ス

(十) 荷造法其費用及運賃

荷造方法ハ貿易品トシテハ荒箱ニ入レ之ヲ繩ニテ結ヒ八九才ヲ以テ一梱トシ或ハ近來商館ニ直接取引ノモノハ出帆
箱ト稱シ八分板製ノ箱ニ(平均四才)收メ又内地向ハ大櫃ト稱シ六分板ニテ製シタル凡十才位ノ箱ニ收容シテ發送ス
而シテ荒箱ハ平均一梱金二十五錢出帆箱ハ平均一梱金一圓二十八錢大櫃ハ平均一梱金四十八錢トス運賃ハ横濱行一
才ニ對シ三錢五厘神戸行ハ一才約七錢ヲ要ス

(八) 中形染

(一) 産 額	年 次	價 額
同	明治三十七年	二四七、七〇〇 ^円
同	明治三十八年	三二一、三〇〇

(二) 種 類	同	三十九年	五九八、〇〇〇
---------	---	------	---------

(三) 中形大島染、幾世緋、輸出染布

(三) 主 要 産 地

濱名郡曳馬村日本形染株式會社ニ於テ製造ス

(四) 資本金及事務員職工數

本會社ハ明治三十三年ノ創立ニシテ當時十二萬圓ナリシカ事業ノ擴張ト共ニ二十二萬圓トナシ更ニ五十萬圓ニ増加
セリ

事務員	拾 名
男 工	百五十人
女 工	二十五人

(五) 原料需用供給

原料ハ遠江及尾張一ノ宮附近産岡本綿ヲ用ヒ輸出染布ハ會社所在地附近産ノモノヲ用ユ

(六) 販 賣 手 續

本會社ハ全國各地及滿韓各地ノ有名ナル商店ト特約ヲ結ヒ之ヲ代理店トシテ各地ニ販賣シ精算ハ月限リヲ例トス

(七) 製 品 ノ 價 格

中形大島染ハ一反平均一圓二十五錢
幾世緋ハ一反平均一圓六七十錢

輸出染布ハ一反平均二圓

(八) 荷造法及其費用運搬費

總テ函入トナシ帶鐵ヲ以テ之ヲ卷ク荷造費ハ一反ニ付金三錢、運搬費ハ一反ニ付金二錢八厘ヲ要ス

(九) 輸出 先

直接北清地方ノ特約店ニ輸送ス

(九) 樂器

(二) 產額

年次

價額

明治三十七年

一一四、三五〇

同 三十八年

一二六、七六七

同 三十九年

三〇〇、〇〇〇

(三) 主要產地

濱名郡濱松町日本樂器製造株式會社(資本金二十四萬圓)ノ製造ヲ主トス

(三) 從業者數

事務員

二十名

男 工

百五十名

女 工

二十五名

(四) 原料需要供給

原料ノ供給ハ内地品ト外國輸入品トヲ用ヒ一々之ヲ列舉シ難キモ大略左ノ如キ原料ヲ要ス

櫻、姫子松、朴、白楊樹、黑柿、樺、楓、以上信濃國

護謨引布、以上亞米利加

鋼鐵線、人造象牙、透羅紗、以上獨乙

笛梓用黃銅板、同會社製造、笛梓黃銅平線、鋤用黃銅線、以上大阪

(五) 販出額及仕向地

需要地ノ重ナルモノハ内地ナルモ海外需要地トシテハ左ノ數國ナリ

ヱイクトリヤ、ボンベール、シンガポール、天津、上海、濠洲、英國等ナリ

今參考ノ爲メ明治三十七年ヨリ三十九年ニ至ル三ヶ年間濱松驛積立數量ヲ示セハ左ノ如シ

明治三十七年

八十八噸

同 三十八年

三十三萬〇九百斤

同 三十九年

三十三萬〇〇九十一斤

(六) 販賣手續

東京、大阪ニ代理店ヲ設ケ東西ニ販出スル樂器ハ大概此代理店ヲ經由シテ各地ニ供給セラル近年清國ニ向テ需用増加シタルヲ以テ營口ニ支店ヲ設ケ以テ北清地方ニ供給シ尙其地海外輸出ハ會社ヨリ直接輸出スルモノト東京代理店ヲ經テ輸出スルモノトアリ

(七) 相場

靜岡縣

最低一個ニ付金五拾圓ヨリ三百五拾圓位ヲ要ス

(八) 荷造法並ニ運賃

荷造ハ一々箱ニ入レ周圍ハ嚴重ニ釘付トス費用ハ大小ニ依リ一定セス

(二) 竹製品

(一) 産額

年次	價額
明治三十七年	三三三、四三一
同 三十八年	一六〇、四八〇
同 三十九年	一七二、七〇三

(二) 種類

竹行李、盆、果物籠、菓子器、手巾箱、手袋入、家形、帽子、竹笠、麥麵入等

(三) 主要産地

駿東、富士、志太ノ三郡及静岡市

(四) 製造戸數及職工數

六百九十三戸 一千八百五十七人

(五) 製産ノ狀況

製造家ニ於テ職工ヲ使役シ又ハ女子ニ内職セシメ之ヲ仕上クル等一定セス且ツ工場トシテ見ルヘキモノハ富士郡ニ

竹行李工場一ヶ所アルノミ

(六) 原料需要供給

原料ハ真竹、破竹、煤竹等ニシテ多クハ富士山、天城山又ハ志太郡地方ヨリ産出スル諸種ノ竹ヲ秋ノ彼岸季節ニ伐採シ種類ニ依リ炭焼シ日光ニ晒シ又ハ藥品ヲ用ヒテ變色セシメ之ヲ使用ス原料ハ縣内至ル所ニ豊富ナリ

(七) 製造費及收益比較

製造費ト收益ノ計簿ハ品種ニ依リ一定セス概シテ販賣價格ノ一割乃至一割五分ヲ以テ收益ト見做シテ可ナリ

(八) 輸出及販賣手續

仲買商ノ手ヲ經テ内地向ハ各地ノ販賣店ニ送り外國向ハ横濱及神戸ノ外商ニ見本ヲ示シテ注文ヲ受ケ又ハ製品ヲ直チニ賣込ミ商館ヨリ海外ニ輸出スルノ例ナリ

(九) 荷造法及其費用運搬費

製品ノ種類ニ應シテ外箱ヲ造リ之ヲ收容シテ細括トス概ネ箱代其他材料等荷造共一個ニ付凡ソ金七十五錢位ヲ標準トス運賃ハ静岡驛ヨリ横濱迄ノ概算一個ニ付約四十五錢内外トス

(二) 燐寸

(一) 産額

年次	價額
明治三十七年	六三、八〇一
同 三十八年	九六、六六三

同、三十九年

一二七、一一四

二百五十

(二) 種類

赤燐製、安全製

(三) 主要産地

静岡市及安倍、庵原ノ二郡トス

(四) 製造戸數及ビ職工數

十三戸

職工數三百三十八人

(五) 製産狀況

静岡市ハ製造戸數三戸ニシテ精燐合資會社ノ如キハ資本ヲ増加シ株式組織トシテ盛ニ製造シ其他個人ノ産造家二戸アリ其他郡部ノ産造家モ皆産額増進ノ狀況ヲ呈セリ

(六) 原料需要供給

薬器ハ舶來品ニシテ横濱及大阪地方ヨリ供給ヲ仰キ柚木ハ奥羽地方ヨリ輸入シ箱ノ原料ハ本縣産ヲ使用ス

(七) 製造費用収益比較

製品ハ一噸ニ付(六百打)原料代金九圓六拾錢、職工賃(金八十三錢 函貼)税金雜費四十五錢計金十二圓三十八錢ヲ要シ収益ハ別項相場額ニ對シ十四錢ノ利益アリ

(八) 相場

一噸ニ付金十二圓五十二錢ノ賣價トス

(九) 輸出及販賣手續

輸送不便ニシテ輸出不引合ノタメ本縣ノ燐寸ハ未タ海外輸出ヲナスス地方小賣ノ外山梨、神奈川ノ二縣下ニ販出スルニ止マル

(十) 荷造法其費用及運搬費

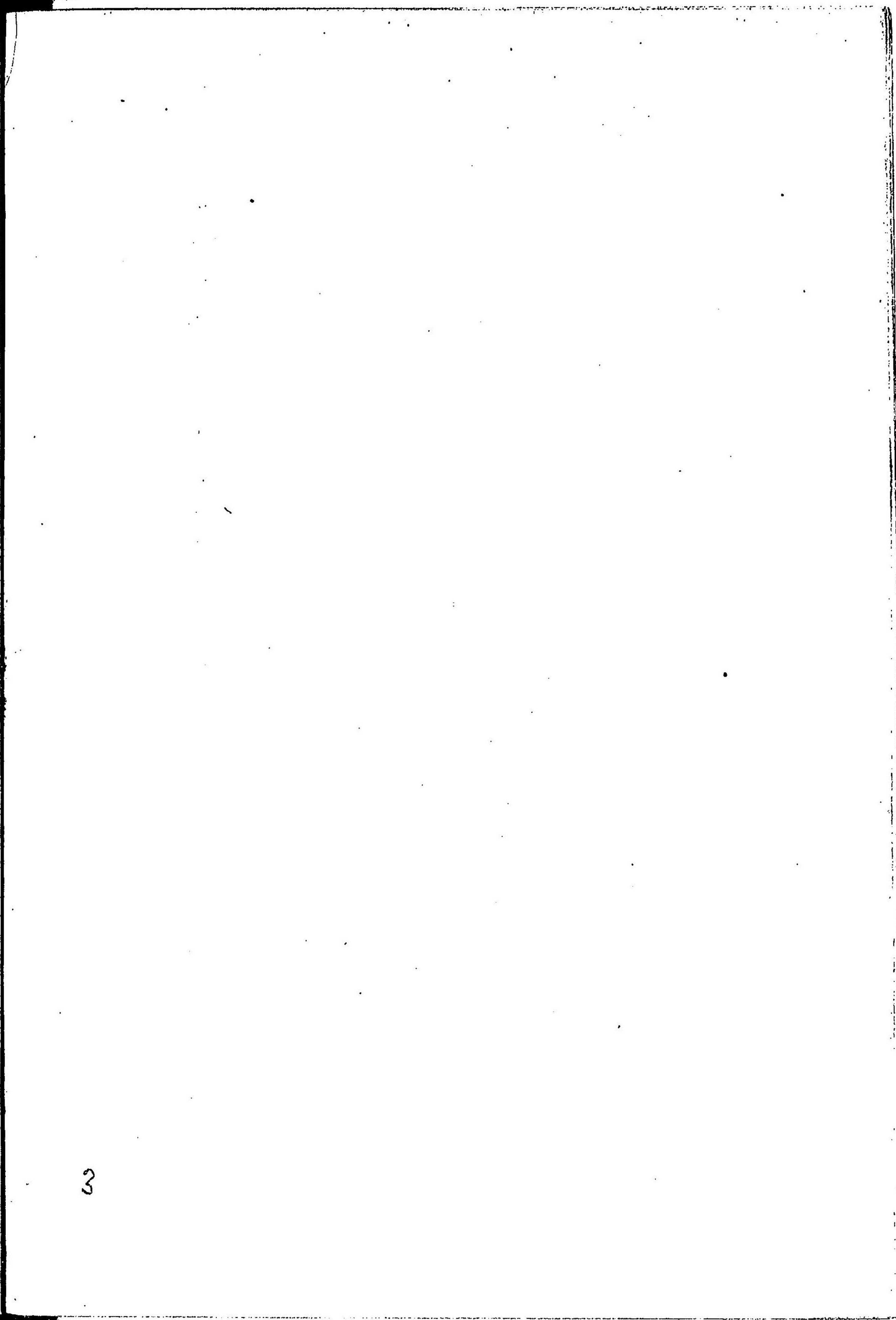
一噸六百打入ヲ便宜二百打ツ、函入トス費用ハ一噸ニ付金六十七錢運搬費ハ静岡市ニ於テハ停車場迄一個ニ付金二錢ヲ要ス

明治四十二年九月廿五日印刷
明治四十二年九月三十日發行

農商務省商務局

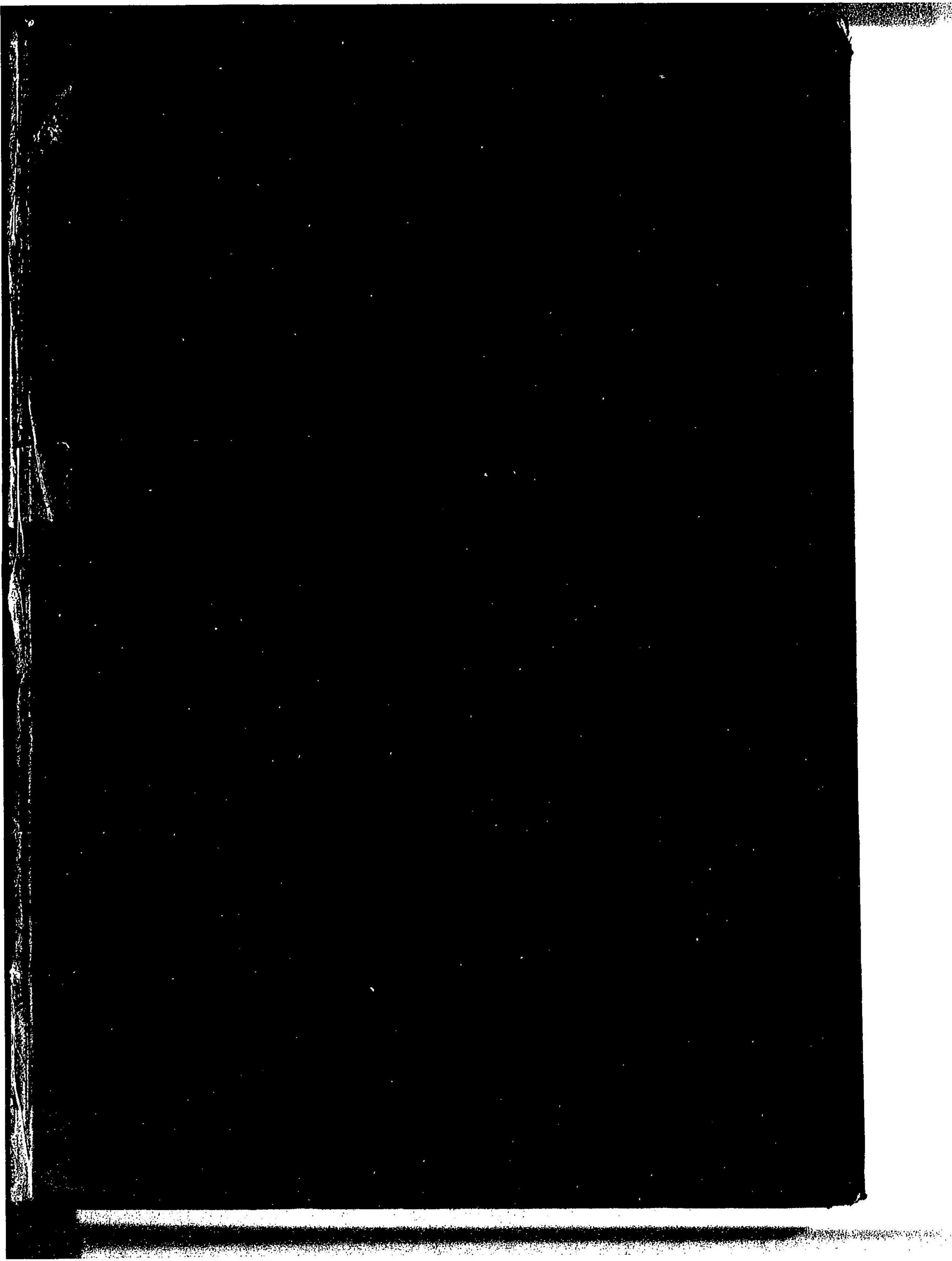
印刷者 東京市神田區表神保町二番地
三島 宇 一 郎

印刷所 東京市神田區表保保町二番地
弘 文 堂



3

321
42



321

42

